乳幼児期の食育に関する調査研究

寺　田　清　美

1．研究目的

近年子どもの朝食欠食や生活習慣病の若年化など健康の問題は深刻化している。乳幼児期から食を通じた人間性の形成・家族関係づくりによる心身の健全育成を図ることが重要であるが，なかでも就学前の乳幼児を持つ母親においては，「離乳や食事」について 4 ～ 6 か月時の離乳食開始時期での不安がうかがわれる（厚生労働省2006）。

こうした子どもを巡る環境の変化の中で，食育や離乳食援助に対する必要性は高まっており，1985年前後から，食物をかまない，飲み込めないなど咀嚼機能に問題のある幼児が全国的に発生している状況が報告され（堂本他1985），その実態調査や原因究明が試みられてきた（二木1985a・b・1991・白川他1985・村木他1990・水野1993・川端他1995）。具体的には咀嚼発達を「歯ぐき食べ」と食の「かたさ」の因果関係で検討したもの（二木1985a），咀嚼上の問題発生と母親の育児観の関与を検討したもの（白川他1985），母親の心理状態の影響で検討したもの（二木1985b）等がある。

また，保育所に関する研究は，ベビーフードに関する実態調査（水野1994a・遠藤2003）や安全な食品の啓蒙（池本2007）などに焦点が当てられており，乳幼児期における保育所での取り組みと咀嚼力・食品認知力育成との関連について検討した研究は少ない。また，保育士と保護者の両方の意識を分析することで，保育側の取り組みと保護者の受け止め方やニーズの一致・不一致を検討した研究は見当たらない。

筆者は，26年間保育所保育士として勤務した経験から，保育者が一人の子に対して，離乳期の食品の与え方や，調理方法などに意識を持ち，保育所全職員が連携するか否かはその後の子どもの好き嫌いや咀嚼力育成に影響があると考えている。また，1998年から10年間子育て支援ルームを主催してきたが，育児不安と乳幼児期との食と関係の深さを実感している。そこで，幼い時期から乳児に対する理解を深めて欲しいという思いから，小・中・高校の教室にあかちゃんとその親をつれた「あかちゃんとのふれあい授業」を年間 6 回～ 8 回継続的実施している（寺田2005）。

そこで本研究では，ふれあい授業の中で，乳幼児の離乳期にはどのような援助が必要なのかを探り，感想を聞き撮り調査した。さらに，在宅乳幼児も含む，乳幼児に対して食を育成することを目的としてどのような保育内容が展開されているのかを調査したので，以下に報告する。

2．研究方法

全国 8 地域の保育所乳児の食育，特に咀嚼力育成に関する実態を把握するための質問紙調査を実施するとともに，特色ある保育所にて聞き取り調査を行う。質問内容は，以下の15問である。各項目について，「非常にそう思う」「まあそう思う」「どちらともいえない」「あまり思わない」「全くそう思わない」の 5 択法での回答を依頼した。

アンケート項目

（無印は職員・保護者共通質問項目とする）

①「離乳食の進度状況があることを保護者は知っていると思うか」（職員）「……知っているか」（保護者）

②「離乳状況に合わせて職員が説明や相談に応じているか」（職員）「……知っているか」（保護者）

③「説明・相談によって変わったことがあったか」

④「保育園での野菜の栽培や給食便り・メニューレシピなどは園児の食育に関係があると思うか」

⑤「園児（わが子）は咀嚼力が身についているほうだと思うか」括弧内保護者

⑥「園での対応は幼児期の咀嚼力に影響がある」

⑦「０歳児から入園した園児は，１歳児以降入園した園児に比べて，好き嫌いが少ない（ようだ）」括弧内は未入所児保護者向け

⑧「４・５歳組で咀嚼力が弱いと感じる園児は朝食を食べてこないことと関係がある」（職員のみ）

⑨「４・５歳組で好き嫌いが少なく，咀嚼力があると感じる園児は保護者の意識が食に対して高いことと関係がある」（職員のみ）

⑩「０歳児時期，離乳食の進度会議を行うことは必要である」

⑪「保護者に試食会・献立説明会を行うことは必要である」

⑫「あなたの園では，職員間で離乳食（食育）対応について話し合いは活発に行われている方である（ようである）」括弧内（保護者）

⑬「あなたの保護者は，朝食を毎日子どもに与えていると思うか」（職員）
「朝食を毎日お子さんは食べていますか」（保護者）

⑭「もし園で朝食が食べられる制度が出来たら園の保護者は利用すると思いますか。」（職員）
「もし園で朝食が食べられる制度が出来たら利用したいと思いますか。」（保護者）

⑮「（食事に関して）園の保護者対応は，育児不安解消の一助になっている」

（１）対象者

①保育所職員②保育所保護者（子どもの年齢は６歳未満児）③未入所児保護者：保育所未経験者（子どもの年齢は②同様）④子育てサロン等サポーター員⑤学生（著者授業受講生短期大学１・２年生140名）

（２）方法

学生は，2007年実習後に，園給食・離乳食状況のアンケート調査を実施した。①保育所職員②保育所保護者③未入所児保護者④子育てサロン等のサポーター員に対して2007年７・８月にアンケート調査を実施する。

「あかちゃんとのふれあい授業」を東京都K区T高校で2007年度６回（５月28日・７月２日・９月10日・10月29日・11月19日・２月４日），東京都N区H小学校で同年度３回（５月15日・10月16日・２月14日）実施した。その際に生徒が離乳食の作成とあかちゃんに提供する中で，サポートする保育者・協力者の親・生徒等参加者にアンケートや聞き取り調査を行った。

これらの結果を踏まえて，特色をもった食育支援事業を展開しているいくつかの保育所に出向き，食育支援事業の観察および，支援の提供者に対する聞き取り調査を実施した。以上のデーターを下に分析した。その中で乳幼児への食を育成することを目的とし，その意義の捉え方を調査した。

なお，調査は全国的調査のため，あらかじめ保育所より献立表を取り寄せ，入園間もない４月献立以外は地域差がないことを確認した。

また，本来，児童福祉法内表記のように，保育所と表示すべきだが，通称保育園が一般的である

ため，質問紙においては「保育園」と表記した。さらに，生活の中で「咀嚼力がある•無い，あるいは，身についている・身についていない」という言葉を聞くが，その基準は人により差異がある。そこで，『咀嚼力』について，咀嚼力が身についていないと判断される基準が必要であり，その定義（基準）は二木（1985a）の「固いものが噛めない，口に溜める，出す，噛まずに丸のみする」，などを参考に、以下のように定めた。

〔咀嚼力の定義〕

＊給食を食べるのに40分以上かかる　＊食べものが数分以上口の中に残る

＊堅い食べ物を食べようとしない　＊噛まずに飲み込む　＊吸い食べをしている

さらに，本稿において重視する『食品認知力』について，以下のように定義した。

〔食品認知力の定義〕

＊それぞれの食品の素材の構成や素性に関する認識を高め，それぞれに対する自らの嗜好性を判断し行為にうつす能力及び好き嫌いにこだわらず摂食する能力とする

（例えば，茸を総称して呼ぶことが多いが，茸の中でもシメジとしいたけの味の違いに気付いたり，幼児期には言葉でその差異を表現したり，自分の好みを表現できることなど）

さらに，**保育者を経験年数別に若手（５年以下），中堅（６～15年），ベテラン（16年以上）と定義した。**

３．結果

（１）保育所職員・保育所保護者・未入所児保護者の回答数

ⅰ　単純集計結果：保育所職員：N＝866　保育所保護者：N＝853　未入所児保護者：N＝170

ⅱ　保育所職員・保育所保護者・未入所児保護者の比較

保育所職員：N＝847　保育所保護者：N＝853　未入所児保護者：N＝170

ⅲ　保育所職員について経験年数による比較

若手（５年以下）：N＝325中堅（６～15年）：N＝229ベテラン（16年以上）：N＝293

ⅳ　保育所保護者について子どもの人数による比較

１人：N＝364　２人：N＝379　３人：N＝106（有効回答数は計849）

（２）比較分析の結果

比較分析にあたっては「各層×各選択肢を選んだ人数」のクロス集計を行い，χ^2乗検定および残差分析を行って各層の差異を検討した。なお，先掲の15項目の質問についてχ^2乗検定を行うにあたり，多くの項目において『そう思わない』の回答頻度が少なく，０である場合も少なくなかったため，『あまりそう思わない』と合計して分析を行った。

以下に，各項目に対する回答の結果について，全般的な傾向と各比較分析においてみられた顕著な傾向をまとめる。なお，表は統計上有意差がみられたものや特徴的な傾向がみられた分析結果について掲載した。

（２）－1.　保育所職員・保育所保護者・未入所児保護者の比較

①乳食の進度状況把握　以下質問内容を＊印表記する。「離乳食の進度状況があることを保護者は知っていると思うか」（職員）「離乳食の進度状況を知っているか」（保護者）

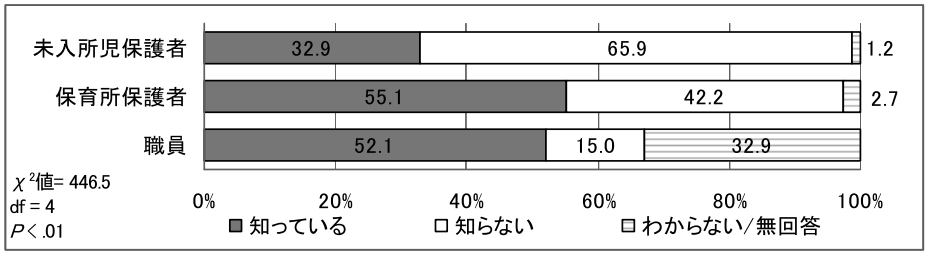

図１　離乳食の進度状況把握

保育所職員の52.1％は，離乳食の進度状況を保護者は『知っていると思う』と回答している。一方，『知らない』，『分からない』の回答を合わせると47.9％になる。また，同様の質問に対して，55.1％の保育所保護者は『知っている』と答え，42.2％は『知らない』と回答した。調査協力者は０歳児の保護者だけではなく，幼児組の保護者もいるため，実態を知らない保護者がいると思われる。未入所児の保護者のうち『知っている』との回答は32.9％であり，『知らない』との回答は65.9％に上っていた（図１）。

②離乳食の説明や相談関連

＊「離乳状況に合わせて職員が説明や相談に応じているか」（職員）「知っているか」（保護者）

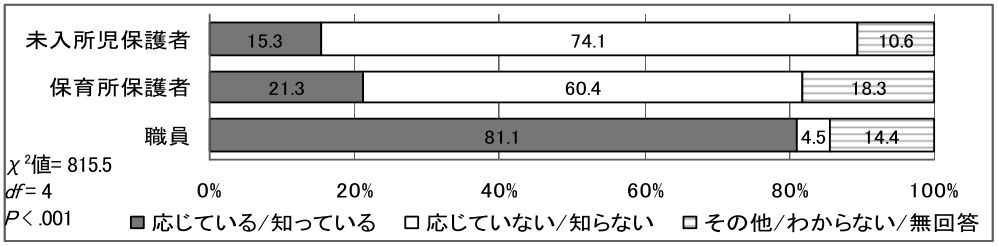

図２　離乳食の説明や相談関連

保育所職員の81.1％が離乳食の説明や相談に『応じている』と回答している。一方，保育所，未入所児保護者共に『知らない』，『応じていない』との回答が約８割と高い。職員としては十分説明をし，応じているつもりでも保育所保護者や地域の乳幼児を持つ保護者には理解されていない現状が浮き彫りになったといえる。さらに，職員の中に『わからない』・無回答の数値が14.4％あった（図２）。

③説明・相談による変化　＊「説明・相談によって変わったことがあったか」

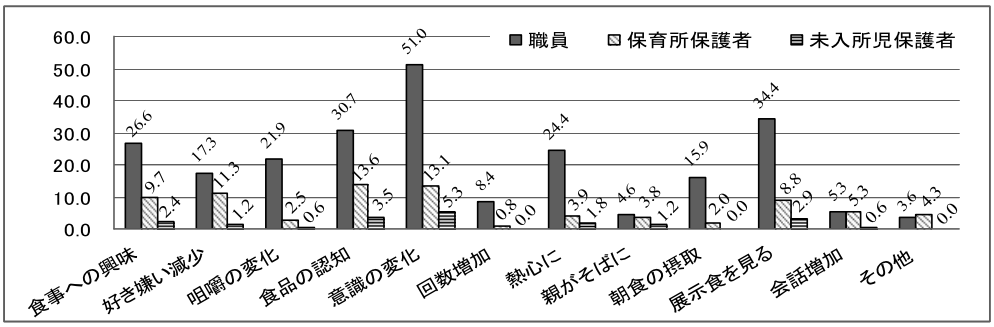

図３　説明相談による変化

職員や未入所児保護者では『意識の変化』の数値がもっとも高く，保育所保護者では『食品の認知』の数値が高い保育所保護者はより具体的な変化を期待していることが伺える（図３）。

④食育との関連性

＊「保育園での野菜の栽培や給食便り・メニューレシピなどは園児の食育に関係があると思うか？」

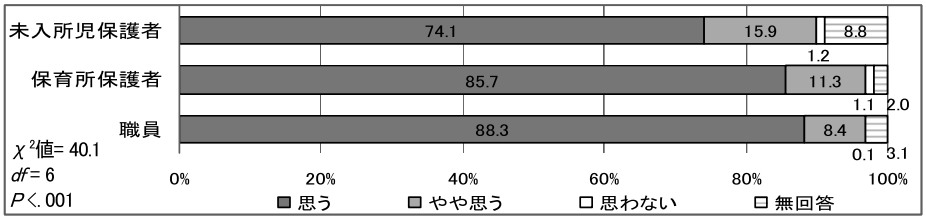

図４　食育との関連性

職員・保育所保護者・未入所児保護者の３群とも『思う』との回答が70%以上に達し，保育所での実践が保育所乳幼児の食育に関係があると感じていることが示唆される。『思う』と『やや思う』の数値を合わせると約９割に上る。特に，職員で『思う』の回答が高かった（図４）。

⑤咀嚼発達

＊「園児は咀嚼力があるほうだと思うか」（職員）＊「わが子は咀嚼力があるほうである」（保護者）

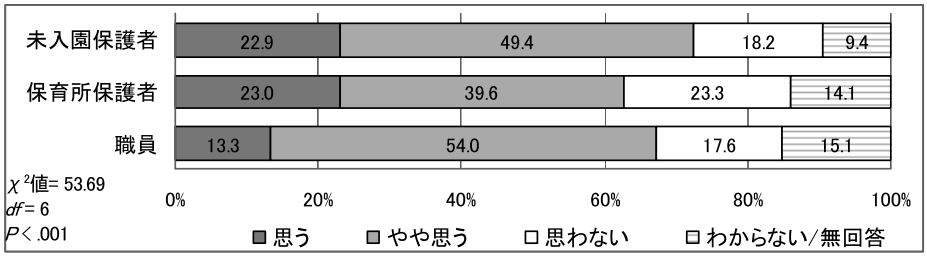

図５　咀嚼発達

『思う』と『やや思う』を合わせると３群ともに６割～７割であり，咀嚼力がおおむね，身についていると感じていることが示唆される。ただし，３群の回答には差異もみられる。職員よりも保育所・未入所児両保護者の方が『思う』と回答し，『やや思う』では職員の方が保護者より多い。さらに『思わない』の回答では保育所保護者の方が職員より多かった（図５）。

⑥　園の対応と幼児期の咀嚼力の影響

＊「園での対応は幼児期の咀嚼力に影響がある」

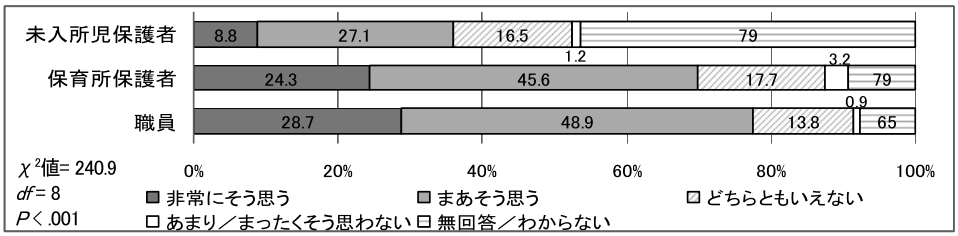

図６　園の対応と幼児期の咀嚼力の影響

保育所職員においては，経験年数のいずれの層においても，『まあそう思う』の割合が最も高く

50%前後（46.1〜50.8%）であり，次いで『非常にそう思う』の割合が高く30%前後（26.5〜30.6%）であった。これらを合わせると約８割に達し，経験年数にかかわらず多くの職員が，幼児期の咀嚼力の発達に園での対応が影響すると認識している。保育者は子どもにとって食事は重要と考えており，その実践に対しての自負心がこれらの数値を高くしていると思われる。一方，保育所保護者の回答も，『まあそう思う』が最も高く（45.6%），次いで『非常にそう思う』（24.3%）であった。合わせると約７割であった（図６）。

⑦０歳入園児と食品認知力の関係

＊「０歳児から入園した園児は、１歳児以降入園した園児に比べて、好き嫌いが少ない（ようだ）」

（）内は未入所児保護者向け

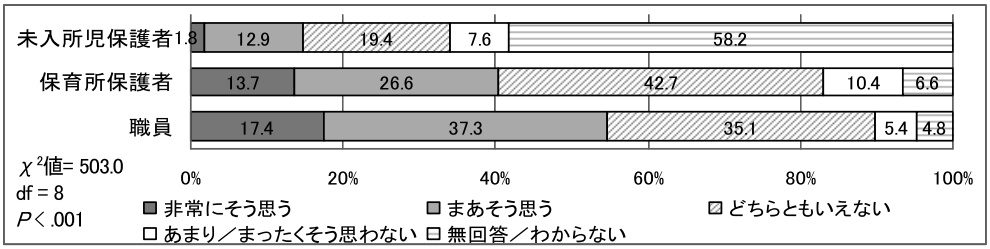

図７－１　０歳入園児と嗜好力の関係

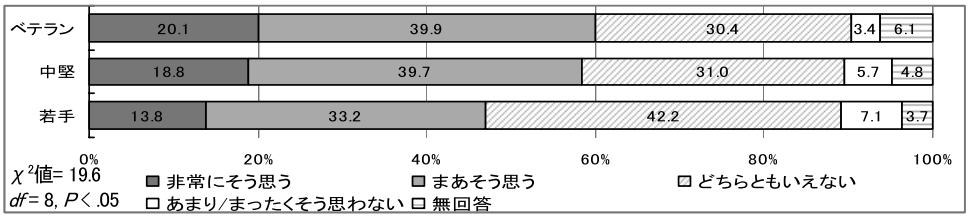

図７－２　０歳入園児と嗜好力の関係

保育所職員において，中堅・ベテランの方が若手に比べて『そう思う』の割合が高く，『どちらともいえない』の割合が低い傾向がある。一方，保育所保護者では，『どちらともいえない』が最も多く，次いで『まあそう思う』が多かった。未入所児保護者では，『わからない』・無回答が多い（図７-１・７-２）。

⑧朝食摂取と咀嚼力関係

＊「４・５歳組で咀嚼力が弱いと感じる園児は朝食を食べてこないことと関係がある」（職員）

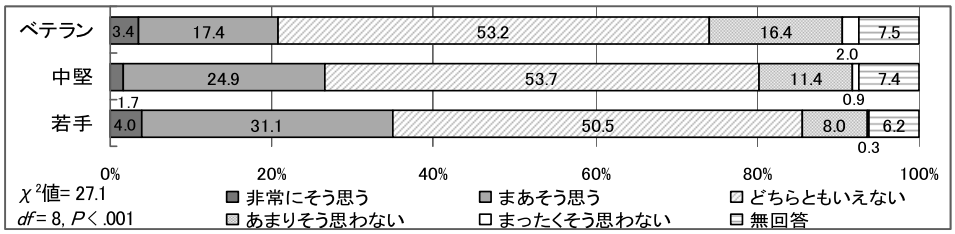

図８　朝食摂取と咀嚼力関係

保育所職員で『どちらともいえない』の割合が高くいずれの層においても約50%（50.5〜53.2%）であった。経験年数による差異としては，（４）に対して，ベテランの方が『あまり／まったくそう思わない』の割合が高く，若手の方がベテランよりも『まあそう思う』の割合が高い（図８）。

⑨　保護者の意識と園児の食品認知力の関係

＊「4・5歳組で好き嫌いが少なく、咀嚼力があると感じる園児は保護者の意識が食に対して高いことと関係がある」（職員）

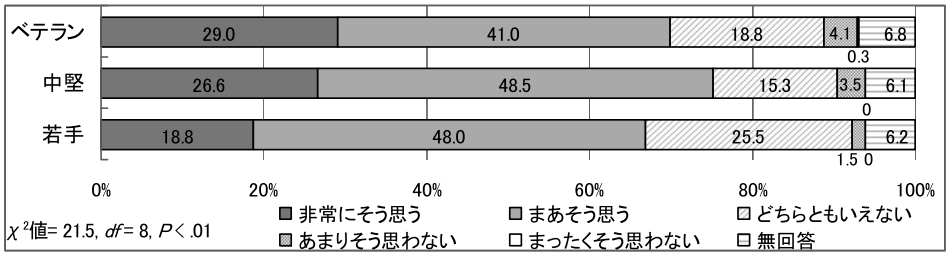

図９－１　保護者の意識と園児の嗜好力関係

保育所職員は，全体的に『非常にそう思う』と『まあそう思う』の割合が高く，いずれの層においても合わせて約70%（66.8～70%）であった。食事は子どもが準備できるものではないので，親が何を用意するかで好き嫌いが決まってくると職員が考えているからだと思われる。また，ベテランの方が若手よりも『非常にそう思う』の割合が高い（図９-１）。

＊「保護者の意識は，園での０歳児期の離乳食の説明や対応の影響があるようだ」（職員）

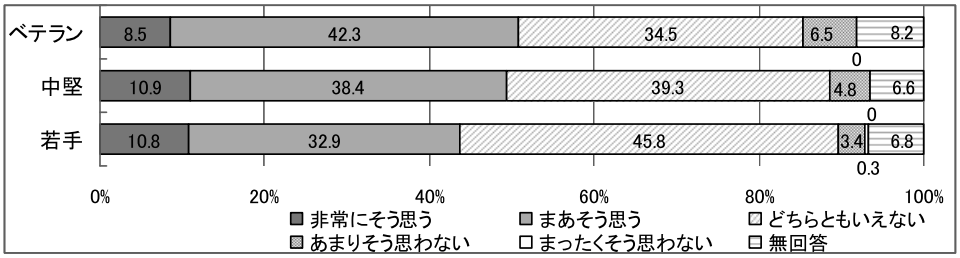

図９－２　保護者の意識と０歳児期の対応との関連

経験年数による差異はあまり見られず，χ^2検定の結果も有意ではなかった。『非常にそう思う』が8.5～10.9%，『まあそう思う』が32.9～42.3%，『どちらともいえない』が34.5～45.8%である（図９-２）。

⑩進度会議　**＊「０歳児時期、離乳食の進度会議を行うことは必要である」（職員）**

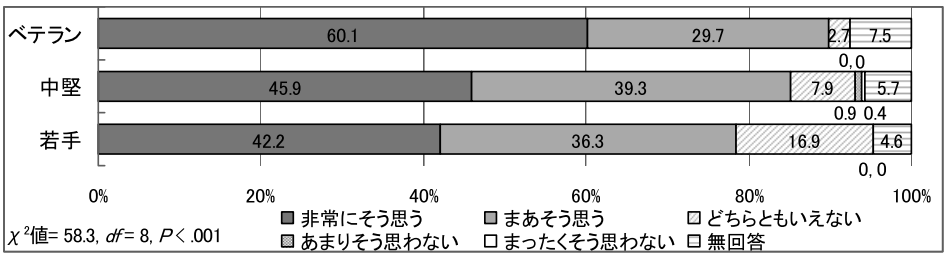

図10　離乳食の進度会議の必要性

『非常にそう思う』,『まあそう思う』の割合が高く，両方で８割～９割程度（78.5%～89.8%）であるが，経験年数による差異も認められた。ベテランは若手や中堅と比較して『非常にそう思う』の割合が高く，『まあそう思う』の割合が低かった。また，若手は『どちらともいえない』の割合が比較的高かった。(図10)。

⑪.試食会・献立会の必要性　＊「保護者に試食会・献立説明会を行うことは必要である」（職員）

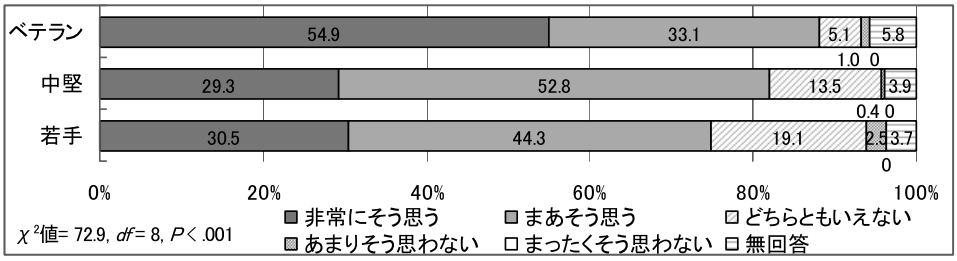

図11　試食会・献立説明会の必要性

保育所職員は，全体的に『非常にそう思う』と『まあそう思う』の割合が高く，いずれの層においても合わせて約70％（66.8～70％）であった。また，ベテランの方が若手よりも肯定的に捉えていた。(図11)。

⑫職員間での（食育）会議状況　＊「あなたの園では、職員間で離乳食（食育）対応について話し合いは活発に行われている方である」・（活発に行われているようである)」（括弧内保護者）

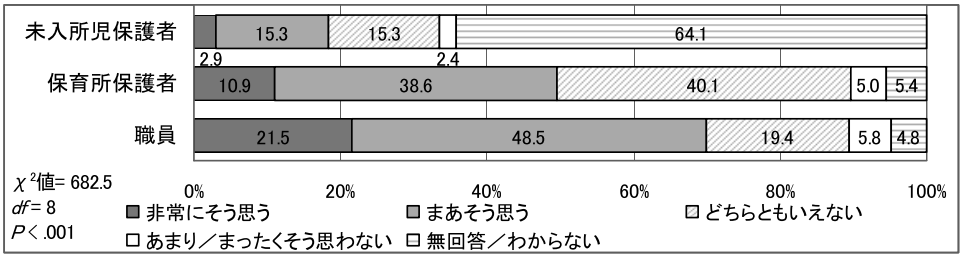

図12－１　職員間の話し合いについて

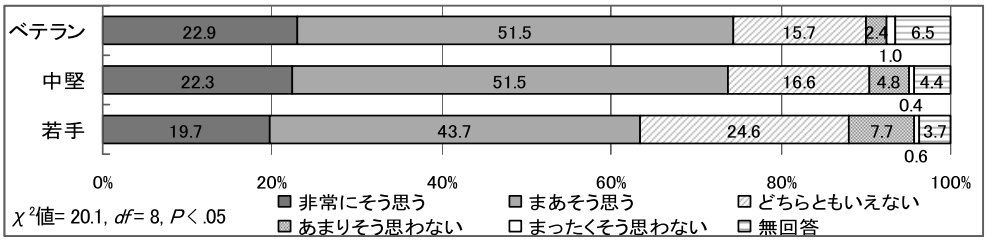

図12－２　職員間の話し合いについて

保育所保護者では，『非常にそう思う』，『まあそう思う』を合わせると約半数に達する。これらの保護者は，園で離乳食や食育への対応がよくなされていると感じており，話し合いも活発に行われているだろうと推測しているものと考えられる。ただし，『どちらともいえない』の割合も40.1％であり，『そう思わない』や無回答の場合を含めると，50％を超える（図12-１)。保育所職員では，いずれの層においても『まあそう思う』との回答の割合が高く約半数である。一方，経験年数による差異も見られ若手では『まあそう思う』の割合が比較的低く，『どちらともいえない』や『あまり／まったくそう思わない』の割合が高い傾向にある。(図12-２)。

⑬地域における園の役割　＊「あなたの園に、保護者以外の地域の親が、離乳食や幼児食などの不安や悩みの相談に来ることがある」（職員）

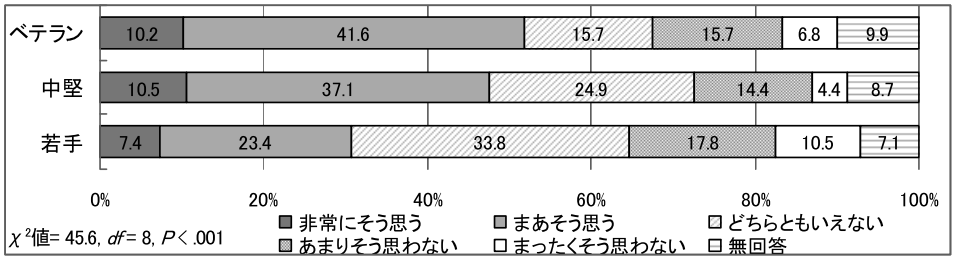

図13　地域の親による相談

保育所職員のいずれの層においても『まあそう思う』の割合が高く 4 割～ 5 割程度（42.2%～53.2%）であり，次いで『どちらともいえない』の割合が高く 3 割前後（27.6%～30.5%）である。一方，保育所保護者，未入所児保護者ともに『非常にそう思う』の割合が高く，『まあそう思う』の割合も合わせると80%以上になる。ただし，保育所保護者では，子どもの人数による差異も見られた。どちらの質問に対しても，子どもが 1 人の場合は 2 人以上の場合に比べて，『非常にそう思う』の割合が低く，『まあそう思う』の割合が高かった。(図13)。

⑭入園時期による差異　＊「離乳食や子どもの食事全般に関して、0 歳児入園児と幼児期入園児とでは違いが見られる」

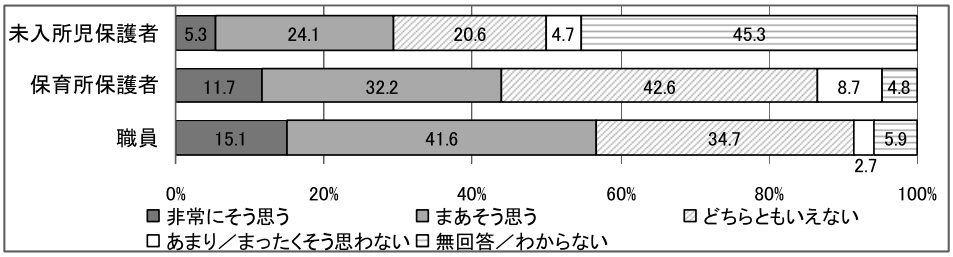

図14　0 歳入園児と幼児期入園児の相違の存在について

保育所職員では，全体的として『まあそう思う』との回答の割合が最も高い。『非常にそう思う』と合わせると 5 割以上になる。特にベテランは若手に比べて『非常にそう思う』の割合が高い。一方で若手は『どちらともいえない』の割合が高く39.1%であった。図 7 や図 8 と同様，ベテランと若手の経験の差が表れている。保育所保護者では『どちらともいえない』が最も多く，次いで『まあそう思う』が多かった。(図-14)。

⑮朝食提供状況と利用希望　＊「あなたの保護者は、朝食を毎日子どもに与えていると思いまいますか」（職員）「朝食を毎日お子さんは食べていますか」（保護者）

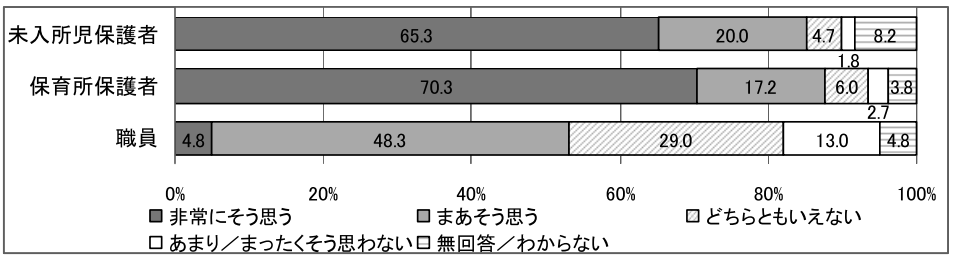

図15－1　朝食について

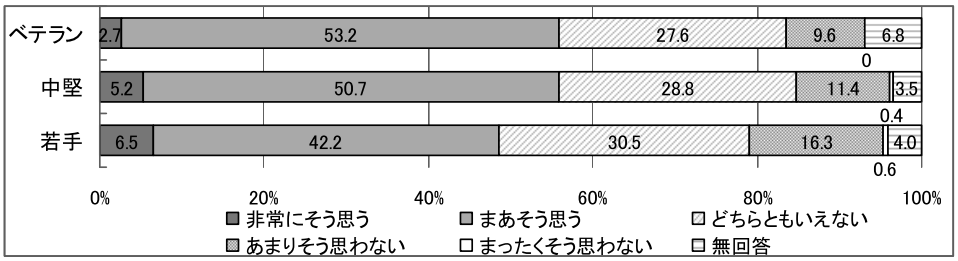

図15－２　朝食について（職員階層別）

保育所職員のいずれの層においても『まあそう思う』の割合が高く４割～５割程度（42.2%～53.2%）であり，次いで『どちらともいえない』の割合が高く３割前後（27.6%～30.5%）であった。経験年数による差異も見られ，若手はベテランに比べて『まあそう思う』の割合が低く，『あまり／まったくそう思わない』の割合が高い。一方，保育所保護者，未入所児保護者ともに『非常にそう思う』の割合が高く，60%以上に達している。また，『まあそう思う』の割合も20%前後であり，合わせると80%以上になる。ただし，保育所保護者では，子どもの人数による差異も見られた。どちらの質問に対しても，子どもが１人の場合は２人以上の場合に比べて，『非常にそう思う』の割合が低く，『まあそう思う』の割合が高かった。

＊「家庭での朝食事時、テーブルで子どもは一人ではなくご家族の誰かと一緒に食事していると思いますか」（職員）＊「……ご家族の誰かと一緒に食事していますか？」（保護者）

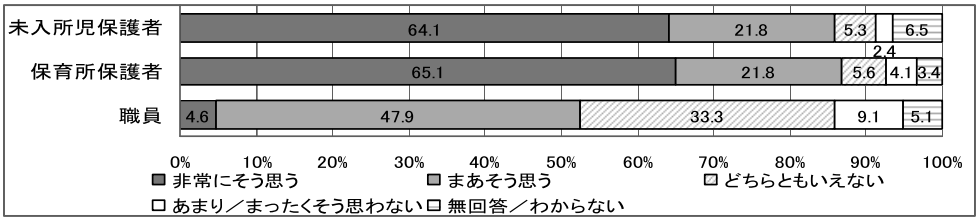

図15－３保護者の朝食摂取状況　家族の誰かと食事しているか

保育所職員では，（図15-１）と同様の全般的な傾向がみとめられた。『まあそう思う』が最も高く５割前後であり，次いで『どちらともいえない』の割合が３割程度であった。

保育所保護者，未入所児保護者でも，（図15-１）と同様の傾向が見られた。『非常にそう思う』の割合が高く，６割以上に達している。また，『まあそう思う』の割合も２割前後であり，合わせると80%以上になる。保育所保護者では子どもの人数による差異も見られ，子どもが１人の場合は，子どもが２人以上の場合に比べて『そう思わない』の割合が高い。

⑯朝食提供利用希望

＊「もし園で朝食が食べられる制度が出来たら園の保護者は利用すると思われますか。」（職員）

＊「もし園で朝食が食べられる制度が出来たら利用したいと思われますか。」（保護者）

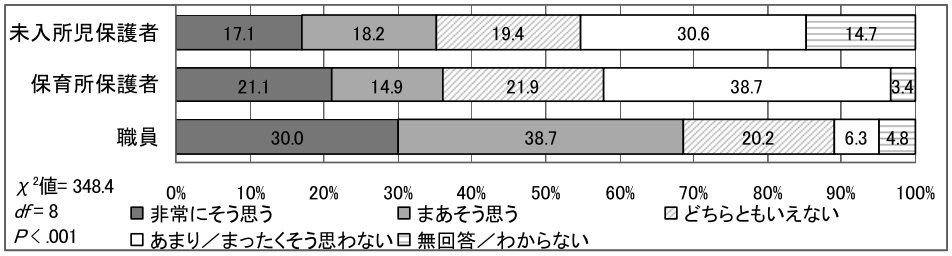

図16　朝食制度の利用について

保育所職員では，いずれの層においても『まあそう思う』と『非常にそう思う』の割合が高く，合わせて 6 割以上（62.5〜72%）に達していた。経験年数による差異として，若手で『非常にそう思う』の割合が比較的高かった（図15- 2 ）（図15- 3 ）（図16）。一方，保育所保護者においては『非常にそう思う』や『まあそう思う』の割合は意外に少なく，合わせても36%であった。一方，『あまり／そう思わない』が38.7%であった。これは，未入所児保護者と比較しても高い値である。

⑰園対応と育児不安解消との関係

＊「（食事に関して）園の保護者対応は、育児不安解消の一助になっている」（職員）

＊「（食事に関して）園の保護者への対応は、育児不安解消の一助になっていると感じる」（保護者）

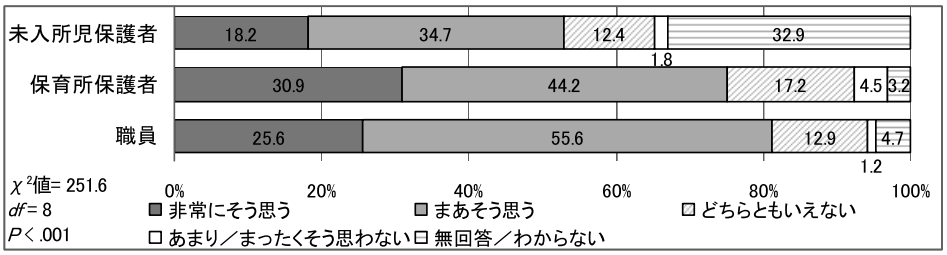

図17-1　保護者対応の育児不安解消効果

保育所保護者では『非常にそう思う』と『まあそう思う』を合わせると全体としては約70%に達し，多くの保護者が食事に関する園の対応を評価している。（図17）一方，経験年数による差異も見られ，ベテランは『非常にそう思う』の割合が高く，若手では『どちらともいえない』の割合が比較的高い（表17- 2 ）。

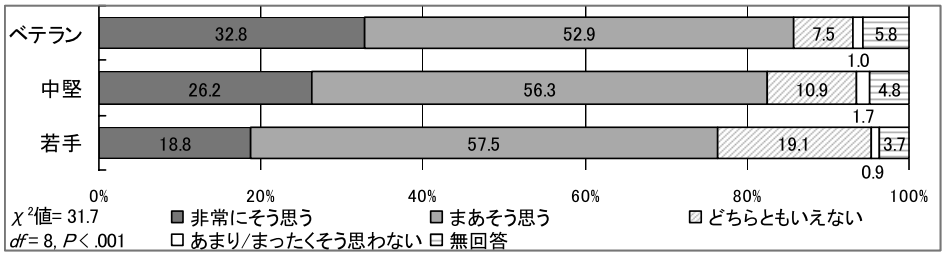

表17-2　園での対応は育児不安解消の一助（職員経験年数）

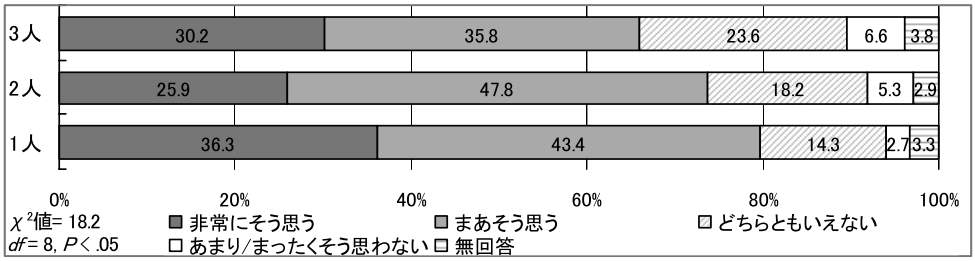

表17-3　園での対応は育児不安解消の一助（保育所保護者子どもの人数）

子どもの人数が１人の場合は，子どもが２人以上の場合に比べて『非常にそう思う』の割合が高く，『あまり／まったくそう思わない』の割合は低かった（表17-３）。

（２）－2.　保育所保護者・未入所保護者に対しての項目比較

以下に，保育所保護者，未入所保護者に対してのみの項目の回答結果を示す。

⑱保護者「わが子は咀嚼力があるほうである」

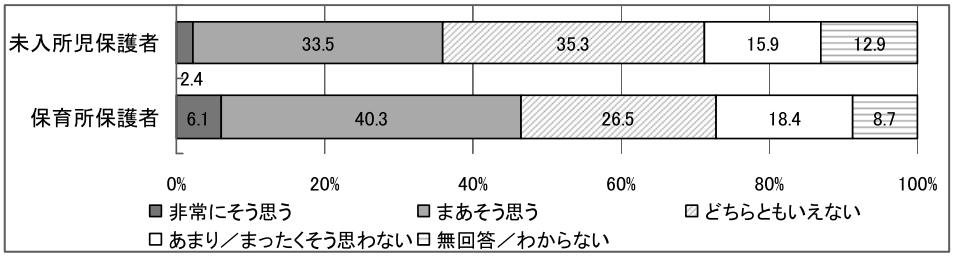

図18　わが子の咀嚼力について

保育所保護者では，『どちらともいえない』と『あまり／まったくそう思わない』の回答が合わせて44.9%である。これは，子どもの様子からもっとよく噛んでほしいと感じていると考えられる。一方，未入所児の保護者は低年齢の子どもの母親が多いため判断することが難しく『まあそう思う』，『どちらともいえない』，『あまり／まったくそう思わないの』数値が拮抗する結果になっているかと思われる。

⑲ わが子の好き嫌いについて　＊保護者「わが子は、好き嫌いが少ない」

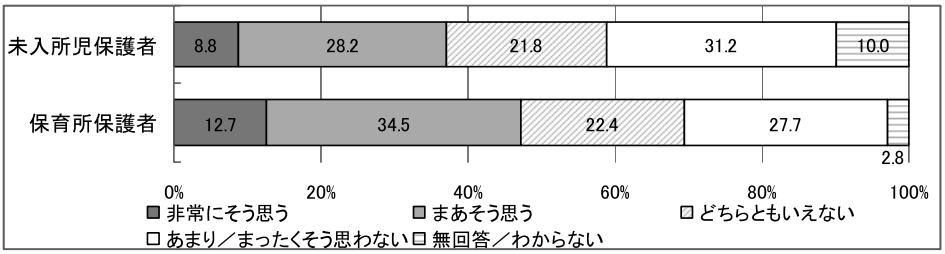

図19　わが子の好き嫌いについて

（図18）と類似した結果であり，保育所保護者では『どちらともいえないと『あまり／まったくそう思わない』の回答が合わせて50.1%である。

⑳離乳食の説明と食育との関係

＊保護者「園での０歳児期の離乳食の説明はわが子の食育に関係がありそうだ」（保育所保護者）

＊「園での０歳期の離乳食の説明は子どもの食育に関係がありそうだ」（未入所児保護者）

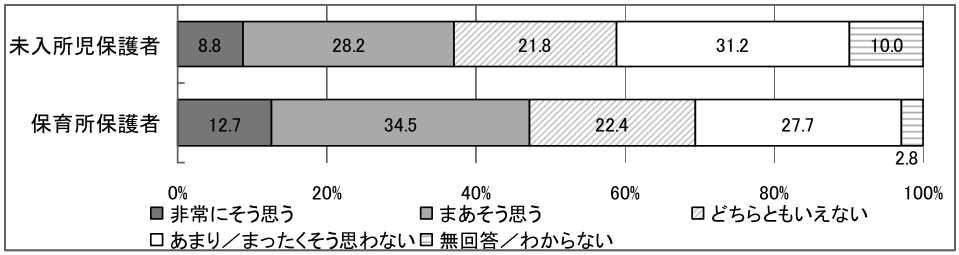

図20　離乳食の説明と食育との関係

保育所保護者では，『まあそう思う』と『非常にそう思う』を合わせて53.4%に達し，未入所児保護者では『まあそう思う』が50.6%と保育所保護者の33.2%よりも多い。

㉑離乳食について＊保護者「０歳１歳の時期、離乳食は作った方だと感じる」

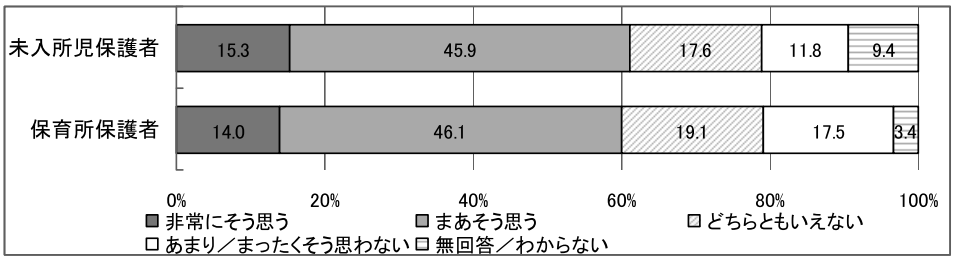

図21　離乳食について

『まあそう思う』の割合が最も高く，保育所保護者で46.1%，未入所児保護者で45.9%である。この質問に対する回答の傾向に保育所保護者と未入所児保護者との差異は少ない。

（２）－3.　未入所児保護者に対しての項目の比較

以下に未入所児保護者に対してのみの質問項目への回答結果を示す。

㉒離乳食を食べないことへのイライラ感

＊未入所児保護者　「離乳食を作ってもお子さんが食べてくれないとイライラする」

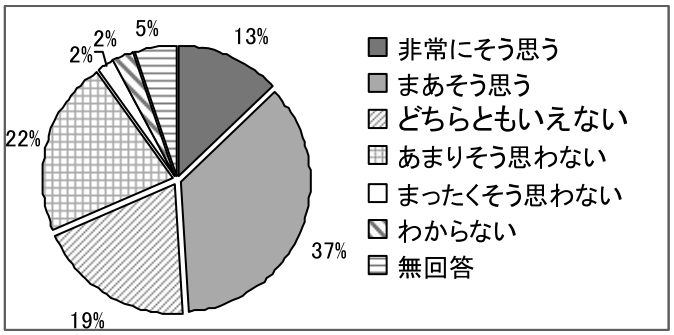

図22　離乳食を食べないことへのイライラ感

未入所児保護者の回答として，『まあそう思う』の割合が最も高く35.9%であり，『非常にそう思う』と合わせると約半数に達する。このように離乳食を与える際にイライラを感じる場合がある保護者も多く，イライラが重なれば育児ストレスや育児不安につながる可能性もある。(図22)。

㉓園での試食会への参加　＊未入所児保護者　「園での試食会に参加してみたい」

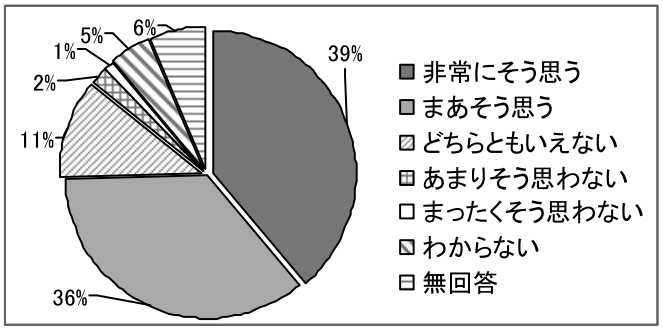

図23　園での試食会への参加

『非常にそう思う』が38.8%,『まあそう思う』が35.9%であり，合わせると70%以上になる。地域の親における保育所での試食会のニーズは高い（図23)。

㉔離乳食や幼児食に関する悩み相談

＊未入所児保護者「園に、離乳食や幼児食などの不安や悩みの相談に行きたい」

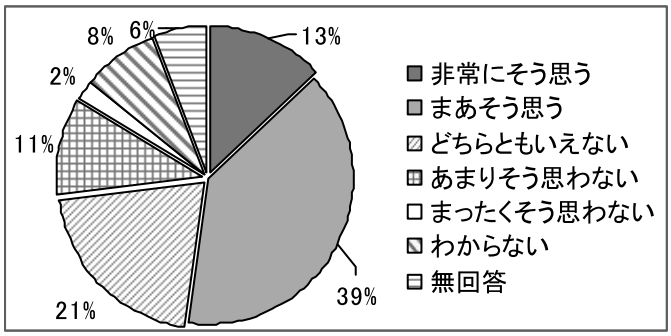

図24　離乳食や幼児食に関する悩み相談

『まあそう思う』が最も高く39.4%,『非常にそう思う』の12.9%と合わせると50%を超える。保育所における食に関する相談への要望も比較的高いことが示された（図24)。

㉕地域での研修会の開催希望

＊未入所児保護者　「地域での離乳食や咀嚼に関する研修会などの開催を希望する」

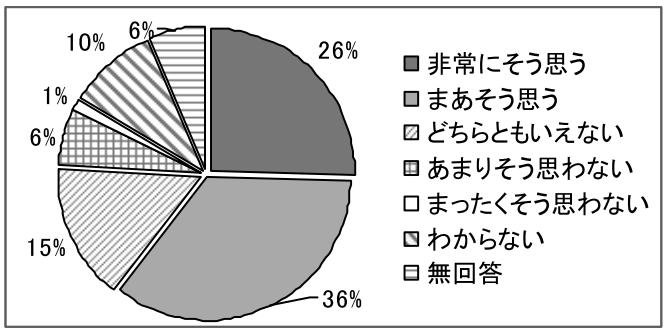

図25　地域での研修会の開催希望

『まあそう思う』が最も高く35.3%,『非常にそう思う』が25.3%で合わせると約60%である。

（3）学生のアンケート結果

2007年８月11日現在の140人分集計結果

107保育所回収中，参考になる82所を分析する。内訳は，０歳児実施64所，１歳児以上18所である。

１）離乳食について

①離乳食は，何段階に分けて提供しているか　（）内数値は保育所数を表記。

＊準備・初期・中期・完了の４段階（18），後期が加わる５段階（12），中期・後期・完了の３段階（16）

②保護者へのアプローチをどのようにして行っているか。

離乳食の展示が多く，入所時のアンケートや体調を見て接する，家庭で離乳食の準備期間を設けているなどの所が多い。保護者に冊子配布など，保護者との連携を図ることが全体の共通点である。

③試食会は行っているのか

全82所中32所が実施，約４割の割合で試食会を実施している。頻度は，年に１度（６），半年に１度（１），年数回（１），毎月（２），年に１・２度（１），時々（１），３ヶ月に１度（１），保育参加時（２），２ヶ月に一度（３）である。試食会を実施していない保育所からは，学生が実習時に離乳食も含む保育所の食事に対しての説明を丁寧にうけていない。

④昼食時の留意点

楽しい食事〔７〕・挨拶（衛生面）（３），マナーや姿勢（３），好き嫌いの無いようにする（３），咀嚼（１）と言う結果である。作ってから30分以内の摂取・アレルギー児対応。マナーや姿勢重視（３）よりも，楽しい食事（７）が多いが，咀嚼についての数値の低い。

⑤給食について

留意点は，衛生面に気をつける（３），アレルギー対策（４），旬のものを使用する（２）である。さらに，バランスや季節感を大事にする・薄味にする・火を通す野菜を多く，暖かいものをとるようにする・彩りよく，米を多くする・加熱処理をし，素手で触らない・食中毒に注意などが重視されている。

⑥食育に対して行われていたこと

厨房で原材料を見る・野菜を育てる。年間計画に基づいて行う・活動し空腹の状態にする。連絡を密にする・嫌いなものは少しでも食べられるようにする。「サイクルメニュー」を取り入れる。・食材を廊下に掲示・行事食・栄養士の説明会・親子クッキングなどの工夫がみられる。一方，５保育所が挨拶や同じ皿の食品ばかりを食べず順番に食べることを促す「三角食べ」などのマナー重視所もある。

（４）聞き取り調査

①　保育所における職員の意見

保育所の中でも楽しい食事を心がけている所は，保育内容や子どもの好き嫌いに対しての意識が高く，試食会の開催や保護者への展示食やレシピ配布などの工夫・保育士の食事介助位置などの保育内容の工夫がみられる。また，新年度に入って慣れてきた６月頃に職員間でトラブルが起こりやすいこと，さらに，熱心に話し合いが行われている保育所は，離乳期の食品の与え方や，調理方法などに意識を持ち，調理士や看護師•栄養士など全職員で連携している姿が見られた。

咀嚼状況では，個人差はあるが摂食機能を獲得するためには，２歳前後が相応しいことをベテラン保育士から多く聞かれた。また，０・１歳児期に離乳食について丁寧に耳を傾ける保護者は，家庭でＴＶを消して食事をするように変化していることや，『静穏の中だからこそ，味覚を味わい，一緒に食することの楽しさをわが子の姿から感じた。』と語る保護者が増えたことが聞かれた。

T保育所は咀嚼力測定ガムを用いてプレ調査をしてみた。すると，担任は「咀嚼力が身についている」と判断していたが，測定ガムの結果は違いが見られた。体系が痩せ型でおとなしい気質の幼児のため，大人の思いこみと現実の差異に気付くきっかけにもなった。また，保護者からの反応も

良く，虫歯と咀嚼力の関係や食事時間は親子で一緒に楽しく良く噛んで食べることの大切さに気付いた。などの声が聞かれたと，プレ調査保育園の園長先生方は語られていた。

②学生の意見.

保育所の給食や対応は，を高く評価している。保育所での栽培や味や彩り衛生面にへの配慮や，本物の魚を見せたりしていつことなどである。一方，早い段階でお箸を使っていたので驚いた・マナーに関することが楽しい食事摂取から逸脱しないだろうかと危惧される点である。などの声もある。

③あかちゃんとのふれあい授業参加者の意見

「あかちゃんとのふれあい授業」をT高校で6回，H小学校で3回（参加母親毎回数名）実施した。

その際，あかちゃんの母親には離乳食を自宅で作成し授業に参加した。この授業の中で，生徒は離乳食を作成し，味の薄さや離乳段階の細かさに気づき驚く様子がみられた。また，『こんなに苦労して私の両親は離乳食を作成してくれたのだ』と，言う声が聞かれた。

また，調理に対する興味関心も増し，生徒の中には積極的に母親に声をかける者もいた。

『S君のお母さん，私も味見してよいですか？美味しい！お料理上手ですね』『Aちゃんは私が食べさせてあげるより，お母さんの方が安心して食べてるみたい』（そこで，Aちゃんを母親の膝の上に抱いていただき，生徒が離乳食をあげてみる）『あ！食べてくれた，私が作ったおかゆを美味しそうに食べてくれた。嬉しい！』

一方，母親や父親は生徒との交流から，『高校生の皆さんがこんなに真面目で優しく受け止めてくれるのが嬉しい』『私も妊娠する前にこのような事業（授業）に参加してみたかった。』『離乳食を作るのは楽しみでもあり，不安も沢山ある。小学生や高校生の時にこのような体験をする意義は大きいと思います』『毎日二人きりでの育児から生徒さんと一緒にこの子と遊べるかと思うと離乳食作る楽しみが増えます』と語っていた。

④身近な子育て応援団に発展

4年前にあかちゃんとのふれあい授業に参加した生徒が，自分達で出来る身近な子育て応援はないものか，と，寺田研究室の門を叩いた。そこで，身近な子育て応援活動を展開していくことになり，あかちゃんの母親・父親と共に，子育てバリアフリー調査を都内4箇所で実施した。この調査では，ファミリーレストランにおける離乳食メニューの実態調査や調査活動後，地域センターを利用して離乳食やサツマイモの茶巾絞りを作成して，乳児とその母親や父親と共に食べてみた。また，食育と排便の関係の深さを知る「食育・便育」の勉強会も実施した。その様子は2007年11月17日東京新聞に掲載された。

⑤子育て支援者の意見

子育てサロンスタッフの殆どが保育所における離乳食の進度会議や保護者支援の実態を知らない。給食便りや保健便り・園便りは，小児科医院・保健所などで見かけることがあるが，展示食や試食会の開催など保育所の情報は，殆ど知らない。今回のアンケート調査により，保育所の実態を知り，是非，サロンに訪れている未入所保護者にも，保育所における食育活動に参加の機会を拡大して欲しい。さらに，専門的アドバイスをサロンスタッフとしても知りたいとの意見が多く聞かれた。

4．考察

（1）　保育所職員と保護者との関係

今回の調査結果から，多くの保護者は，保育所での給食内容や職員の子どもへの働きかけが咀嚼力を育てていると感じていることが伺える。保育所の給食の内容や摂食状況などの情報の伝達により，給食内容に対する保護者の信頼度は高く，子どもの満足度や給食サンプルなどによって肯定的

に判断していると思われる（表３）。保護者は，保育所での給食が子どもの成長にとって大事なものと考えており，食育の面からも保育所の役割が大きいことがわかる（図４）。また，多くの保育所保護者が試食会や献立説明会の必要性を認識しているといえる（図11）。

（２）保育所職員と保護者と差異

保育所で食育を行っているのに，保護者が十分認識していない部分が見られた（図２）。この結果から，適切に伝えることの難しさもあるが，職員の話し合いが活発に行なわれていても保護者に，伝わっていない状況もみられる（図12-１）。

また，摂食機能を獲得するための学習効果には感受性の高い時期があり，その時期を失うと効果が得にくくなりその時期は１歳半から２歳半であるといわれている（二木1985ａ）このような視点から今回の調査をみると，保護者の中には咀嚼力がどのようなものなのかの知識や関心が薄く，年齢が増すと食べ方は子どもの個性の影響と思う傾向が反映されている。（図５）。

さらに，咀嚼力や食品認知力の育成に影響力があるのは，朝食を食べてこないといった個別の行動ではなく，『保護者の意識の高さの影響が大きい』と，多くの保育所職員は考えており，ベテランになるにつれてこのように認識する傾向が強いことも考察できる（図８・９）。

また，多くの保育所職員が離乳食の進度会議の意義を認識しているが，特にベテランは，強く必要性を認識する数値が高い（図10）。ベテランになるほど，経験の中でさまざまな取り組みが子どもの食育にとって重要な役割を果たす事を強く認識するようになる（図４）。また，多くの保育所職員が食事に対する取り組みが育児不安解消の一助になっていると評価している（図15-１）が，特にベテランは高く評価する傾向があった（図15-２）。さらに，（図13•14）の結果からも，保育所職員は，保護者が朝食を毎日与えたり，一緒に食べているかについて，積極的に肯定してはおらず，園で朝食が食べられる制度ができたとしたら保護者は，利用するだろうと予測している。特に若手は，保護者に対して否定的な見方をする傾向があることが示唆された。

また，個人差はあるにせよ，子どもは摂食時に親と一緒の方が保育士の時に比べて，自由度が高いために，食品に対する会話の数が多く，好き嫌いを素直に表現することが多い。そのため，子どもが保育所生活を重ねる中で『嫌いな食品をいつの間にか食べるようになり，食品名を認知した』と気付く機会は，職員よりむしろ保護者の方が多い（図３）。このことからも，全般的に職員の説明・相談による変化を感じている割合は，保護者の方が，職員よりも高いことが示唆された。

（３）保育者の若手・中堅・ベテランによる差異

保育者の経験年数による比較から，若手に比べてベテランは，その豊富な経験に基づき，食に対する園での取り組みの効果や重要性をより強く認識していることが示唆された。たとえば，０歳入所児と１歳児以降に入所児の咀嚼力や食品認知の違いや（図７），離乳食の進度会議や保護者への試食・献立説明会の必要性，保育所の育児不安を解消する役割等について，若手よりもベテランの方が強く認識しているという結果であった（図９•11•12-２•表17-２）。ベテラン保育者が多くの子どもや保護者と関わった経験によって実感してきた食育の重要性を，経験知として若手に伝達すると同時に，若手もそれを手ごたえとして感じられるよう実践の中で援助しながら共に食育に取り組んでいくことが必要であると考えられる。

一方，自分の保育所における食育についての話し合いや地域の子育て支援など，取り組みの現状については，経験年数にかかわらず多くの保育者が肯定的に評価していた。ただし，若手では不十分と感じている人も比較的多い（図12-２）。ベテランや中堅にとって活発な話し合いであると感じられるものであっても，経験の浅い若手に対しても理解しやすい十分な情報が伝達されていないとか，若手の意見が取り入れられない場合もあるのかもしれない。ベテラン，中堅，若手と経験の異

なる保育者が定期的あるいは日常的に交流し，十分な情報伝達や意見交換を行いながら，それぞれが連携・協力して保育所全体で食育に取り組んでいくことが求められる。

（４）保育所保護者の要望

保育所保護者の多くは，保育所での対応と幼児期の咀嚼力との関連について肯定的に評価している（図５）。保育所の給食の内容や摂食状況などの情報伝達，子どもの満足度などによって肯定的に判断していると思われる（図３・４）。また，多くの保護者が食事に関する保育所の対応を育児不安解消の一助として感じている（図17）。実際に保育所での取り組みや保育者による助言や共感によって助けられていると感じているのだろう。このことは，保育所での食育が子育て支援の一端を担うものであることを示している。今後も継続して保護者のニーズや不安に寄り添う支援をしていくことが必要であることはいうまでもない。

また，育児不安解消としての評価は子どもが１人の場合は，より高かった（表17-３）。特に初めての子どもの場合，授乳や離乳食，卒乳等について悩みや不安も高くなりやすいと考えられる。また，毎日朝食を食べない，子どもが家族の誰かと一緒に食事をしていない割合が，子どもが２人以上の場合に比べて１人の場合にやや高かった。子どもが１人の場合は，保護者・家族の生活が優先され，巻き込まれやすいのかもしれない。こうした結果から，特に支援ニーズの高い第一子とその保護者に，試食会開催や展示食説明など具体的な助言や注意を向けていく必要性がある。

（５）未入所児保護者の要望

保育所での取り組みは，地域の保護者に対する子育て支援としての役割をも担っている。これは，未入所児保護者の回答者の半数以上が保育所での対応は育児不安解消の一助となると回答していることからも示唆されることである（図17）

また，保育所や地域における子どもの食に関する支援を要望する地域の保護者は多い（図25）。特に，試食会や研修会など，子どもの食に関するアイディアを得たり学んだりする機会に対するニーズが高いことが明らかになった（図23）。今後も，こうした要望に応える支援のあり方を探っていくことが必要である。

（６）学生の意見と子育て支援現場から見えること

あかちゃんとのふれあい授業体験から，両親への感謝の気持ちを抱く高校生や大学生の姿も見られ，小学生は移動教室で収穫した林檎のすりおろしと市販の瓶詰めとを比較し，『本物の方が甘くて良い』と，美味しさを改めて実感していた。また，乳幼児食に対する興味関心も増し，乳幼児が美味しいそうに食べる顔の表情や手振り・身振りに真剣に向き合い，母親と乳幼児との愛着の深さを体感していくようである。

回を重ねる毎に，母親・父親の離乳食に対する意識の変化も見られた。また，この事業参加の保育者や保健師・主任児童委員・子育てサロンスタッフなど地域協力者は，生徒とあかちゃん親子との離乳食援助をサポートする中から世代を超えた学びの大きさを実感していくことは，意義深いことと考察する。また，地域で支えあうことにより，育児不安予防策につながり，大学生が身近な子育て応援試食会に自ら参加する姿も高く評価できる。

５．結論

（１）保育所職員と保護者の認識の差異への対応

本研究では，摂食状況に合わせた説明や相談に，保育所職員としては十分に応じているつもりでも，保育所保護者や地域の乳幼児を持つ保護者には理解されていない現状があることを明らかにした。また，職員の話し合いが活発に行なわれているかどうか認識していない保護者も多く，活発な

話し合いが行われていてもそれが明確に伝わっていない可能性も示唆された。保育所での取り組みについて，保護者にわかりやすく伝え，理解してもらうことは難しいことである。地域の保護者も含め，どのように情報を伝達し，保護者のニーズに応じていけばよいか，その方策を検討していくことが必要である。例えば，離乳食作成や試食会を父親や地域子育て家庭にも参加も呼びかけ行う。時には地域センターとも連携して，「パパのお弁当セミナー」実施も良い方法である（寺田（2008））。

また，朝食を与えているかについて，８割以上の保護者がそうしていると回答している一方，職員は保護者に対して否定的な見方をする傾向があることが明らかになった。職員は，日常的に保護者や子どもと接する中で，きちんと朝食を与えているのか疑問に思うことも多い。与えているとしても単品のみであるなど，職員が持つ食事に対するイメージにそぐわない対応をしている保護者が増えてきている現状もある。しかし，保育所で朝食を食べられる制度ができても，利用したいと思わない保護者も約４割に達する。保護者の中には，食や子育てに対する意識が高く，すべてを保育所に任せるのではなく，できることは自分でしたいと考えている人たちも少なくない。職員は，意識の高い保護者もそうではない保護者もいるという保護者の多様性を認識し，個々のニーズに応じたきめ細やかな対応をしていくための具体的な方策が必要と考える。

（２）保育所職員間の認識の差異への対応

保育所職員への聞き取り調査の結果，新年度に入って慣れてきた６月頃に保育者と調理士などによる職員間でトラブルが起こりやすいことが明らかになった。さらに，熱心に話し合いが行われている保育所は，離乳期の食品の与え方や，調理方法などに意識を持ち，調理士や看護師･栄養士など全職員で連携している姿が見られた。

職員は経験年数により，保護者は子どもの人数により咀嚼力や乳幼児の食品認知力に対する意識の差が見られた。特にベテラン保育者が保護者に対して寛容であり，離乳食期の子育て支援の重要性の意識が高いことが示唆されたことは重要である。例えば，咀嚼状況では，個人差はあるが摂食機能を獲得するためには，２歳前後が相応しいことをベテラン保育者は示唆している。また，０・１歳児期に離乳食について丁寧に耳を傾ける保護者は，家庭でＴＶを消して食事をするように変化していることや，『静穏の中だからこそ，味覚を味わい，一緒に食することの楽しさをわが子を通して感じた。』と語る保護者が増加することを，ベテラン保育者は体験の中から感じているおり，だからこそ，乳児期の食育に対する保護者対応を重視していることが伺われた。これはベテラン保育者が，長い保育経験の中から一人の子どもに対して長期的視点をもち見据えていくことの重要性を会得しており，また保育所や保育者が保育というケアワークに加えて，保育に関する相談・助言等々のソーシャルワーク的機能をもってその役割を果たす時代となり，実践していくことの重要性も高く意識していることと関連すると思われる。それと同時にベテラン保育者が若手保育者に対しての説明し理解を求めていくことの必要性も浮き彫りとなった。さらに，聞き取り調査の結果から，『楽しい食事』を心がけている保育所の職員は，保育内容や子どもの好き嫌いに対しての意識が高く，試食会の開催や保護者への展示食やレシピ配布などの工夫・保育者の食事介助位置などの保育内容の工夫がみられた。

これらは，今後保育所における園内研修の検討課題の一助となりうる結果であろう。

また，保育所は離乳食援助のための知識の宝庫である。子育てや保育の知識，技術を蓄積している保育所が地域にその機能を開放し，地域連携に努めること（寺田他2005）や，離乳期の相談や試食会など子育て支援をさまざまに試みる営みを，さらに積極的に推進していく必要性があると考えられる。

これまでのアンケート調査や聞き取り調査から，乳幼児や保護者支援で大切なことは，具体的に視覚や味覚，聴覚に訴えることであり，大好きな大人（保育者）と会話しながら食を通じた人間性

の形成や心身の健全育成が図れる『楽しく一緒に食べる経験をする』このことの効果が何よりも大きいことを確認したと考えている。

3）今後の課題

乳幼児の食生活でいま，何が問題か，どういう方向に改善したらよいかをまさに考える時である。乳幼児期の保育の専門性を有する保育者が，保育に関する専門的知識・技術を背景としながら，調理栄養士や看護師など職場内連携を円滑にすすめること，また保護者が支援を求めている子育ての不安や課題に対して，保護者の気持ちを受け止めつつ，安定した親子関係や養育力の向上をめざして，保育指導の専門性を高めること，さらに地域の子育て層に対しても地域連携を深めながら対応していくこと，これらは保育所の特性を生かした保護者支援に不可欠な要素である。

このことは，今後幼保一体化がすすむ状況の中で，保育所，幼稚園，認定こども園共通に重視されることといえる。

今後は，乳幼児の食育を，特に2歳児についての定点観察や地域・入所年齢・虫歯数・男女などの視点からの比較を継続的に調べてみたい。そして，保育所や幼稚園が地域の核となり在園児やその保護者だけでなく，乳幼児養育家庭が受け止めやすい，保育の専門性を活かした食力育成支援の方法を探り，さらなる食力を育む環境の提言を行いたいと考えている。

文献

堂本暁子，貝塚康宣，二木武，高野陽，赤坂守人，1985　口腔の機能，特に摂食に関する小児保健的研究，第1報　アンケートによる実態調査，第32回日本小児保健学会講演集，296-297

遠藤マツエ　2003　離乳食の実態と親子関係に関する研究（第1報）保育園児の園生活の観察と保護者の離乳食調査，くらしき作陽大学紀要，36，21-31

二木武，斉藤幸子，水野清子，向井美恵，庄司順一 1985a　離乳食の進め方と咀しゃくの発達（第1報），日本総合愛育研究所紀要，24，187-196

二木武，庄司順一，川井尚，恒次鉄也，野尻恵，斉藤幸子，水野清子，1985b　摂食の心理・行動学的研究（1）摂食行動と意欲との関連について，日本総合愛育研究所紀要，24，197-209

池本文子 2007　保育園における食育との取り組み，母子保健情報56号，24-27

川端昌子，斉藤滋，水野清子 1995　サイコロジーと咀嚼，食べ物のおいしさその文化と科学，日本咀嚼学会監修，建帛社，pp. 20-76

厚生労働省雇用均等児童家庭局母子保健課監修2006　平成17年度乳幼児栄養調査結果の概要，p. 13

前川喜平，前田隆秀，松平隆光，丸山進一郎，吉田弘道 2007　歯からみた幼児食の進め方，保育と保健，13（2），27-29

水野清子，高橋悦二郎 1993　離乳食の調理形態と離乳の進行状況，小児保健研究，52，632-638

水野清子，染谷理絵，竹内恵子 1994a　ベビーフードに関する実態調査　日本総合愛育研究所紀要，33，241-244

水野清子，染谷理絵，竹内恵子，加藤忠明，平山宗宏，中原澄男 1994ｂ　保育所給食に関する研究－保育所通所児の健康栄養食生活の実態－　日本総合愛育研究所紀要，33，19-33

水野清子，染谷理絵，竹内恵子，中原澄男　1998　幼児期における咀しゃくに関する研究　日本子ども家庭総合研究所紀要，35，209～214，

中谷延二2007食育に関する一考察，放送大学研究年報，25，1- 5

寺田清美，星川ひろ子，鈴木良東 2005　あかちゃんが教室にきたよ　岩崎書店

寺田清美，瀧川光治 2006　保育内容・環境，第3章　子どもの発達と自然環境，58-58

寺田清美 2008　父親準備性を育む活動の広がり，世界の児童と母性，65号，55-58

謝辞

ご協力頂きました140保育所や子育て支援関係者の皆様に心から御礼申し上げます。

研究及び調査協力

保育所（社会福祉法人）
（大阪）＊成光苑　第２愛育園　おおわだ保育園　きりん第２保育園〔母子寮50世帯併設〕
（倉敷）＊光明会　小ざくら乳児保育園
＊白鳩会　（大田区浜竹保育園・東大阪白鳩保育園・松山生石保育園）
＊こうほうえん（キッズタウン24鳥取・うきまキッズ園　各園）＊交友会（横浜・岡山　各園）
＊みかり会　多夢の森保育園　・夢の森保育園　（神戸）
＊堺暁福祉会　きらり保育園（神戸）東三国保育園（大阪）
＊いずみ保育園　（香川県高松市）　柏井保育園　（愛知県）＊筑子保育園　（茨城県筑西市）
＊どんぐり保育園　（北海道）＊興道南部保育園（山形米沢市）
＊至誠会　至誠保育園　（新宿）＊すぎのこ会　エイビイシイ保育園（新宿）
公立・他
＊東京家政大学ナースリールーム（東京）
＊北区内公私立49保育所・品川区公立全40保育所・杉並区・豊島区・港区・中央区・他）
＊熊本市内保育園　福岡市内保育所　中野本郷小学校　東京成徳大学高校
＊調査協力子育て広場・NPO
『越谷市子育てサロン』子育てサポーターチャオ・（埼玉県）
「まめっこ」「子ども＆まちネット」他14箇所（愛知県）
地域ぐるみの子育てをすすめるひだまりの会（福岡県）子育て支援グループamigo　（東京）
子育て支援グループ　あさがお（北海道）ほっとほっと・ハートフルママ（中野）
紀要2008論文